



元禄15年（1702）12月15日未明、赤穂藩の旧臣47人が本所松坂町の吉良邸を襲撃し、前当主上野介義央の首級を挙げました。世にいう「赤穂義士の討ち入り」です。港区には元禄赤穂事件に関わる史跡が数多く残されています。

事件の発端は、元禄14年（1701）3月14日の年賀返礼の儀式直前、勅使饗応役を務める赤穂藩主浅野内匠頭長矩が江戸城まつのおおろうかしなんやく松之大廊下にて指南役を務める高家の吉良上野介義央に切りかかったことに始まります。上野介は応戦せず、内匠頭は旗本梶川與惣兵衛に取り押さえられました。重要な儀式直前に刃傷事件を起こしたことに激怒した將軍徳川綱吉は即日、内匠頭に切腹と改易を命じ、内匠頭は陸奥一関藩田村家上屋敷（→20ページ）に送られ、その日のうちに切腹し、家臣の手によって泉岳寺（→23ページ）に葬られました。翌15日には内匠頭の正室（夫人）阿久里（瑤泉院）が実家の三次藩邸（→21ページ）に移り、鉄砲洲の上屋敷や赤坂南部坂の下屋敷も明け渡しました。国許には3月20日に伝わり、藩内では家老大石内蔵助良雄を中心として議論が交わされましたが、結局、開城を決め、4月19日に赤穂城を引き渡しました。

野に下った赤穂藩の旧臣は浅野家再興の運動を進めますが、その望みが絶たれたため、急進派の案をいれ吉良邸への討ち入りを決定します。そして内匠頭の月命日にあたる翌15年（1702）12月14日（実際には15日未明）に討ち入り、上野介の首を挙げます。事を終えた大石らは泉岳寺の内匠頭の墓前に報告した後、大目付仙石伯耆守邸へ出頭します（→20ページ）。大石らは熊本藩細川家・松山藩松平家・岡崎藩水野家・長府藩毛利家にそれぞれ預けられ、翌16年（1703）2月4日に切腹しました（→21～23ページ）。

事件が起きた元禄時代は、5代將軍綱吉の治世下で武断政治から文治政治への転換がはかられ、將軍や幕府の権力が盤石になった時代です。また、経済の発展に伴い庶民の生活が向上し、様々な文化が花開いた時代でもありました。このような太平の世になりつつある時代に、数十人が徒党を組んで旗本高家の邸宅を武力で制圧し、前当主を殺害したこの事件は幕府に大きな衝撃を与えました。そして幕府以上にこの事件を大きく扱ったのが庶民でした。人形浄瑠璃や歌舞伎の題材に取り上げられ、様々な物語をつむぎながら、史実の「元禄赤穂事件」とは異なる『忠臣蔵』物語として現代まで受け継がれています。

港区事件簿を追って

港区事件簿を追って

元禄赤穂事件の故地をゆく



路線図

- 都営浅草線
- 都営三田線
- 都営大江戸線

- JR線
- 京浜急行線
- 東京メトロ銀座線
- 東京メトロ日比谷線
- 東京メトロ千代田線
- 東京メトロ南北線
- ゆりかもめ
- 東京モノレール



コースルート・所要時間

スタート	JR新橋駅	鳥森口	徒歩	10分
1	浅野内匠頭切腹の地跡	徒歩	12分	
2	仙石伯耆守邸跡	徒歩	13分	
3	南郷坂	徒歩	2分	
4	赤穂義士の名切腹の地跡 (毛利屋敷)	徒歩	16分	
観光スポット				
	東六本木ヒルズ ミッドタウン	徒歩	16分	
	六本木ヒルズ展望台	徒歩	25分	
	ちいばす (甲州ルート)	徒歩	25分	
	宮線 三田駅前六分	徒歩	5分	
5	赤穂義士の名切腹の地跡 (水野監物邸跡)	徒歩	20分	
	旧細川邸のシイの木	徒歩	3分	
6	大石内蔵助ら切腹の地跡	徒歩	10分	
7	泉岳寺	徒歩	5分	
ゴール	都営浅草線 泉岳寺駅	徒歩	5分	

■ 徒歩
■ 交通機関利用

目黒区

品川区

元禄赤穂事件の故地をゆく



コラム 『忠臣蔵』の世界と港区

「赤穂義士の討ち入り」といいますと、多くの方は『忠臣蔵』を思い浮かべるのではないのでしょうか。しかし、厳密にはこの2つはイコールではありません。もちろん、^{あさのたくみのかみ}浅野内匠頭が江戸城松之廊下^{きらくさげのすげ}で吉良上野介に切りかかり、幕府から切腹^{かいふく}と改易^{かいぎ}を言い渡されたこと、また大石内蔵助^{おおいしくらのすけ}ら浅野家の旧臣47人が吉良邸に討ち入り、上野介の首を挙げたことはまぎれもない事実です。ただし、私たちが『忠臣蔵』でよく知る^{おる}勘平の物語などは完全な創作ですし、内匠頭が上野介に切りかかった理由についても、賄賂説、乱心説などがまことしやかに流布していますが、実ははっきりとした理由はわかっていないのです。このように「元禄赤穂事件」で思い浮かべる名場面の多くは、『忠臣蔵』という物語によ

て創り出されたものなのです。

赤穂義士の切腹後間もない元禄16年（1703）2月16日、中村座でこの事件を會我物語^{そがものたり}になぞらえた『曙會我夜討』^{あけぼのそがのようち}が上演されますがすぐに幕府によって禁止されます。3年後の宝永3年（1706）には上方^{あかまつもんご}近松門左衛門^{えもん}の作による人形浄瑠璃『^{じようるり}基盤太平記』^{こぼんたいへいき}が上演され、塩冶判官^{えんや}（浅野内匠頭）^{おおほしゆらのすけ}、大星由良之助^{はんがん}（大石内蔵助）^{おおほしゆらのすけ}、大星力弥^{りきや}（大石主税）といった配役の原型が作られます。その後、『^{おにかげむ}鬼鹿毛無佐志鑑』、『^{ちゆうしんご}忠臣金短冊』などの作品が生まれ、吉良邸討ち入りから46年目の寛延元年（1748）にこれらの作品を集大成する形で、^{たけだいずも}竹田出雲^{ちゆうしんご}ららの合作による人形浄瑠璃『^{かたてほんちゆうしんごら}仮名手本忠臣蔵』が完成し、大坂竹本座で上演されます。これが大好評となり歌舞伎に取り上げら



芳幾 仮名手本忠臣蔵

豊国 高輪 由良之助
『東海道日本橋品川間』

れ、江戸でも森田座、市村座、中村座の江戸三座で競演されることになりました。以後、『忠臣蔵』といえば『仮名手本忠臣蔵』をさし、様々な演技・演出が加えられ、また錦絵や子ども向けに作られたおもちゃ絵（例えば、芳幾「仮名手本忠臣蔵」）などの題材となります。

赤穂義士が終焉を迎える港区には『忠臣蔵』物語を語る上で重要な場所があります。赤穂義士が本懐を遂げ、主君が眠る泉岳寺へと報告に赴くところは物語のラストシーンを飾る重要な場面です（ただし、歌舞伎では上演されない場面です）。彼らは本所松坂町の吉良邸を出た後、深川を南下して永代橋を渡り、八丁堀、築地、芝、高輪を経て泉岳寺に到着します。一勇齋国芳が描いた「忠臣蔵義士高輪引取之図」や、三代歌川豊国の



豊国 東都高輪泉岳寺開帳群集之図

『東海道日本橋品川間』^{とうかいどうにほんばししながわかん}「高輪由良之助」^{たかなわ ゆらのすけ}も義士引き上げの場面を描いた作品です。また、歌川広重の『忠臣蔵』^{うたがわひろしげ}「焼香場」^{しょうこうば}は泉岳寺で内匠頭墓前に向かう義士の姿を描いています。いずれも衣裳はきらびやかに描かれ、歌舞伎の影響を強く受けていることがみとれます。あるいは、「東都高輪泉岳寺開帳群集之図」^{とうとかなわせんがくじかい}（三代歌川豊国）は、『仮名手本忠臣蔵』の登場人物たちが開帳で賑う泉岳寺に参詣に訪れるという趣向で描かれ、このように名所と『忠臣蔵』をリンクさせる作品も登場します。

江戸時代の中ごろに誕生した『忠臣蔵』物語は、明治、大正、昭和、そして現代にいたるまで小説や映画、舞台やドラマなどで繰り返し再生産されています。時代の世相や社会観、人生観が反映された日本人の心性に根ざした物語であるといえましょう。



広重 焼香場
『忠臣蔵』

元禄赤穂事件の故地をゆく

あさのたくみのかみ

浅野内匠頭切腹の地跡

所 新橋4-31付近

コース①

元禄14年(1701)3月14日、江戸城松のおおろうか きらこうすけのすけ 之大廊下で吉良上野介に切りつけた播磨赤穂藩5万石の藩主浅野内匠頭はその日のうちに、このあたりにあった陸奥一関藩たむらうきよのだいぶたけあき 田村右京大夫建頭の上屋敷に送られて切腹し、赤穂藩は改易となりました。内匠頭は座敷ではなく庭で切腹し、夕方に浅野家家臣のかたおかげんごえもん いそがいじゅうろつざえもん の片岡源五右衛門・礒貝十郎左衛門らが遺体を引き取り、泉岳寺で葬儀を執り行ったといわれています。

日比谷通り沿いに「浅野内匠頭終焉之地」という石碑が建っています。また、実際の田村家上屋敷は日比谷通りから20mほど東側(およそ現在の新橋4-2~4、28~30)にありました。

都指



せんごくほうぎのかみてい

仙石伯耆守邸跡

所 虎ノ門2-8

コース②

元禄15年(1702)12月15日未明に吉良邸に討ち入り、吉良上野介の首級をあげた赤穂義士は主君浅野内匠頭が眠る泉岳寺へ向かいました。その途中、統領大石内蔵助よしなか よしだちゅうざえもん とみのもりすけ 良雄は副統領格の吉田忠左衛門に富森助右衛門をつけて、大目付(大名を監視する幕府の役職)仙石伯耆守久尚邸に出頭させました。赤穂義士は内匠頭の墓前で報告を済ませた後、寺坂吉右衛門を除く46人が仙石邸に出頭しました。仙石伯耆守はすぐに江戸城に登城し、老中に報告しました。そして老中の協議と將軍綱吉への報告を経て、赤穂義士はそれぞれ細川家、毛利家、松平家、水野家の各藩邸に預けられることになりました。

都指

みよし
三次藩浅野家屋敷跡
(氷川神社)

所 赤坂6-10-1,2 コース③

赤穂事件が起きた元禄時代、このあたりは浅野安芸守（広島藩、浅野本家）、浅野内匠頭（赤穂藩）、浅野土佐守（三次藩）、浅野式部少輔（浅野土佐守の義父）などの屋敷がありました。8代將軍徳川吉宗の頃、ここに氷川神社が建立されましたが、元禄当時は浅野土佐守の屋敷であったと思われます。

元禄14年（1701）3月14日、浅野内匠頭は江戸城松之大廊下で吉良上野介に切りつけ、その日のうちに切腹しました。正室（夫人）の阿久里は髪を下ろして瑤泉院と改め、翌15日に実家の三次藩邸に引き取られました。

【写真】



赤穂義士10名切腹の地跡
(毛利庭園)

所 六本木6-9 コース④

江戸時代、この辺りには長門長府藩毛利家の上屋敷がありました。ここには赤穂義士47人のうち、岡嶋八十右衛門ら10人が預けられ、義士らが預けられた大名家の中でも特に待遇が厳しかったといわれています。元禄16年（1703）2月4日に切腹しました。このうち、間新六郎は介錯を潔しとせず、真の切腹をしたといわれ、遺体は親族に引き取られ築地本願寺に葬られました。

平成15年（2003）、長府藩毛利家の屋敷跡は六本木ヒルズとして様変わりしました。その開発事業の中で、大名庭園の手法を取り入れた毛利庭園が整備されました。

【写真】



元禄赤穂事件の故地をゆく

赤穂義士9名切腹の地跡 (水野監物邸跡)

所 芝5-20-20

コース⑤

きらこうずけのすけ
吉良上野介を討ち取り、大目付に出頭した赤穂義士は4家の大名に預けられます。その1家が三河岡崎藩水野家で、9名が預けられ、元禄16年（1703）2月4日に切腹しました。水野家の中屋敷は説明板の建っている所より50mほど北側にあります。

なお、赤穂義士を預かった大名家のうち、細川家と水野家では彼らを丁重に扱ったといわれており、「細川ほそかわえつちゅうのかみ（細川越中守）の水みずのけんもつ（水野監物）流れは清けれどただ大海もうりかいかみ（毛利甲斐守）の沖まつだいらおきのかみ（松平隠岐守）ぞ濁れる」という落首から当時の世評がうかがえます。

〔都指〕

おおいしちから 大石主税ら切腹の地跡

所 三田2-5-4

おおいしくらのすけ
ここは大石内蔵助の子息主税ら赤穂義士10名が預けられ、元禄16年（1703）2月4日に切腹した伊予松山藩松平家の中屋敷があった場所です。義士が切腹した場所は土を掘りあげて池とし、その土で築山を造ったといわれています。後に築山の上には徳富蘇峰とくとみ そほう せんぶんの撰文による碑が建てられました。現在、イタリア大使館の敷地内に建っています（ただし、参観はできません）。

討ち入りに参加した義士の中には、10代の青年が二人いました。大石主税と、水野家にお預けとなった矢頭右衛門七です。右衛門七は18歳、16歳の主税は義士中最年少でした。

〔都指〕



おおいしらのすけ

大石内蔵助ら切腹の地跡

所 高輪 1-16-2/5

コース⑥

このあたりには肥後熊本藩細川家の下屋敷がありました。吉良邸に討ち入り後、統領大石内蔵助ら17名が預けられ、元禄16年（1703）2月4日に切腹した場所です。切腹の跡地として高松中学校の敷地の一部を塀で囲って保存しています。

先年、同屋敷の北端に当たる地点で発掘調査が行われました。この折、19世紀に埋め潰された井戸から、浅野内匠頭の辞世、大石内蔵助の歌を染め付けた磁器の酒杯が出土しました。赤穂事件が、人々の心に長く記憶されてきたことを物語っています。

〔磁器〕



磁器酒杯



せんかくじ

泉岳寺

所 高輪 2-11-1

コース⑦

泉岳寺は慶長17年（1612）に外桜田に創建された曹洞宗寺院です。寛永18年（1641）の寛永の大火で焼失し、3代将軍徳川家光とくがわいえみつにより、現在の高輪の地に再建されました。この時、家光は毛利・浅野・朽木・丹羽・水谷の5大名に泉岳寺再建を行わせました。この縁により浅野家は泉岳寺を江戸における菩提寺とするようになりました。泉岳寺は曹洞宗江戸三箇寺の1つとして多くの学寮がかりょうや子院しゐんを抱える大寺院でした。

泉岳寺の名を世に広めたのは、やはり元禄赤穂事件と『忠臣蔵』ブームでしょう。江戸時代から多くの人々が参詣に訪れ、今も毎年4月初旬と12月14日に義士祭が行われています。また、赤穂義士ゆかりの品々が赤穂義士記念館に展示されています。

赤穂義士記念館

開館時間：9：00～15：30

料 金：大人500円、中高生400円、小人（10歳以上）250円、小人（10歳未満）無料
団体30名様以上割引あり

問い合わせ：03-3441-5560（泉岳寺）



元禄赤穂事件の故地をゆく

あさのながのり

浅野長矩・赤穂義士の墓

所 高輪2-11-1 泉岳寺

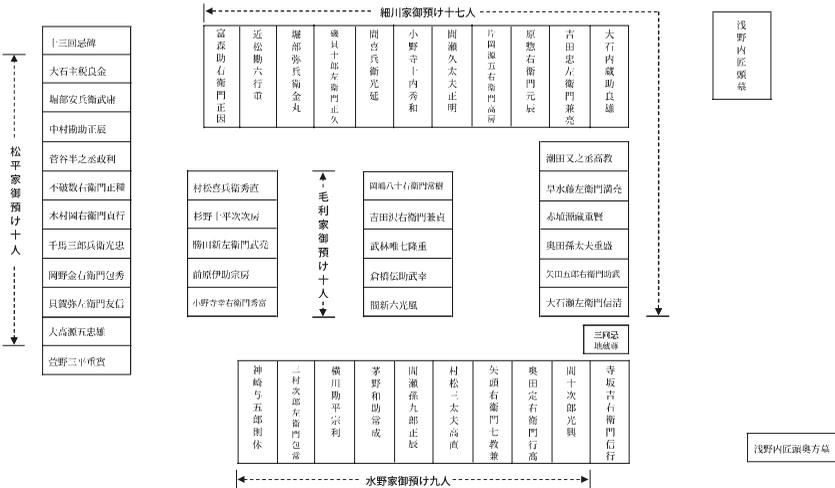
さんもん

山門をくぐり左手へ進むと左側に赤穂義

士記念館、右側に赤穂義士が吉良上野介の首を洗ったといわれる「首洗いの井戸」があります。その先に浅野内匠頭長矩の墓所と赤穂義士47人の墓、また討ち入り前に切腹した萱野三平の墓があります。 園図



墓配置図



長府藩毛利家屋敷での切腹者（→21ページ）

岡崎八十右衛門常樹	享年38
吉田沢右衛門兼貞	享年29
武林唯七隆重	享年32
倉橋伝助武幸	享年34
村松喜兵衛秀武	享年32
杉野十平次次房	享年28
勝田新左衛門武亮	享年24
前原伊助宗房	享年40
間新六郎光風	享年24
小野寺幸右衛門秀富	享年28

*なお寺坂右衛門行行は討ち入り後死去。

岡崎藩水野家屋敷での切腹者（→22ページ）

間十次郎光興	享年26
奥田定右衛門行高	享年26
矢頭右衛門七教兼	享年17
村松三太夫高直	享年27
間瀬孫九郎正稔	享年23
三村次郎左衛門忠常	享年37
茅野和助常成	享年37
横川助平宗利	享年37
神崎与五郎副休	享年38

松山藩松平家屋敷での切腹者（→22ページ）

大石主税良金	享年16
堀部安兵衛武庸	享年34
中村勘助正辰	享年46
菅谷半之丞政利	享年44
不敵数右衛門正輝	享年34
手馬三郎兵衛光忠	享年51
岡野金右衛門貞秀	享年24
木村岡右衛門貞行	享年46
貝賀弥兵衛門友信	享年54
大高源五忠雄	享年38

熊本藩細川家屋敷での切腹者（→23ページ）

大石内蔵助良雄	享年45
原嶽右衛門元辰	享年56
片岡源五右衛門高房	享年36
堀部弥兵衛金丸	享年77
吉田忠左衛門兼亮	享年64
近松勘六行重	享年34
間瀬久太夫正明	享年63
赤穂源蔵重賢	享年35
神崎与五郎副休	享年35
潮田又之丞高教	享年35
富森助右衛門正和	享年34
小野寺十内秀和	享年61
奥田孫太夫重盛	享年57
早水藤左衛門清壽	享年42
矢田五郎右衛門助武	享年29
大石瀬左衛門信清	享年27
樋貝十郎左衛門正久	享年25
間喜兵衛光延	享年69



港区事件簿を 追って

港区事件簿を 追って

幕末・維新事件簿

慶長8年（1603）、徳川家康が江戸に幕府を開き、日本には「平和」の時代が訪れます。それから260年あまりが過ぎ、時は幕末を迎えます。幕府権力の衰退、黒船の来航などをきっかけに攘夷運動、尊皇運動、そして倒幕運動へと時代は流れていきます。この激動の時代の中で重要な舞台となった場所が港区には数多くあります。

外国からの大きなインパクトはやはり嘉永6年（1853）6月3日に浦賀沖に現れたペリー率いる4隻のアメリカ艦隊でしょう。「泰平の眠りを覚ます上喜撰（蒸気船）たった四杯で夜も眠れず」という狂歌が詠まれたように、幕府だけでなく世の人々を驚かせ、日本を鎖国から開国へと導きます。ペリーの再来航に備えて幕府が急いで造った防衛施設が台場で、現在、多くの人々で賑わう「お台場」の地名の由来となっています（→28ページ）。今は2基が国の史跡として

保存されていますが、当時の土木技術の高さをうかがうことができます。

一方、日本国内では徳川幕府と薩摩藩・長州藩などの西国雄藩との軋轢、攘夷運動・尊皇運動の激化、治安の悪化など大きく揺れ動きまします。港区には幕末政治史の舞台や主役といえる人々のゆかりの地があります。特に幕末から明治維新にかけて中心的役割を果たした薩摩藩の屋敷

が複数存在し、様々な事件の舞台となりました。現在の芝2～3丁目あたりには約25,000坪の広大な屋敷があり、戊辰戦争のきっかけとなった薩摩藩邸焼き討ち事件が起きました（→30ページ）。また、現在のJR田町駅前（芝5丁目）には抱屋敷、JR品川駅前（高輪3丁目）には下屋敷があり、いずれも勝海舟と西郷隆盛が江戸城総攻撃前に会見し、江戸城の無血開城が決められた場所です（→30ページ）。

また、この時代の幕府側の重要人物として最初に名前があがる勝海舟は永らく赤坂に住んでいました。居宅は時代によって移りますが、坂本龍馬との出会いで有名な屋敷や、明治維新後、亡くなるまで住んだ屋敷も赤坂にありました（→28、29ページ）。幕末から明治維新へと移りゆく時代の中で転換となった歴史的な事件を追いかけてながら散策してみるのもよいでしょう。



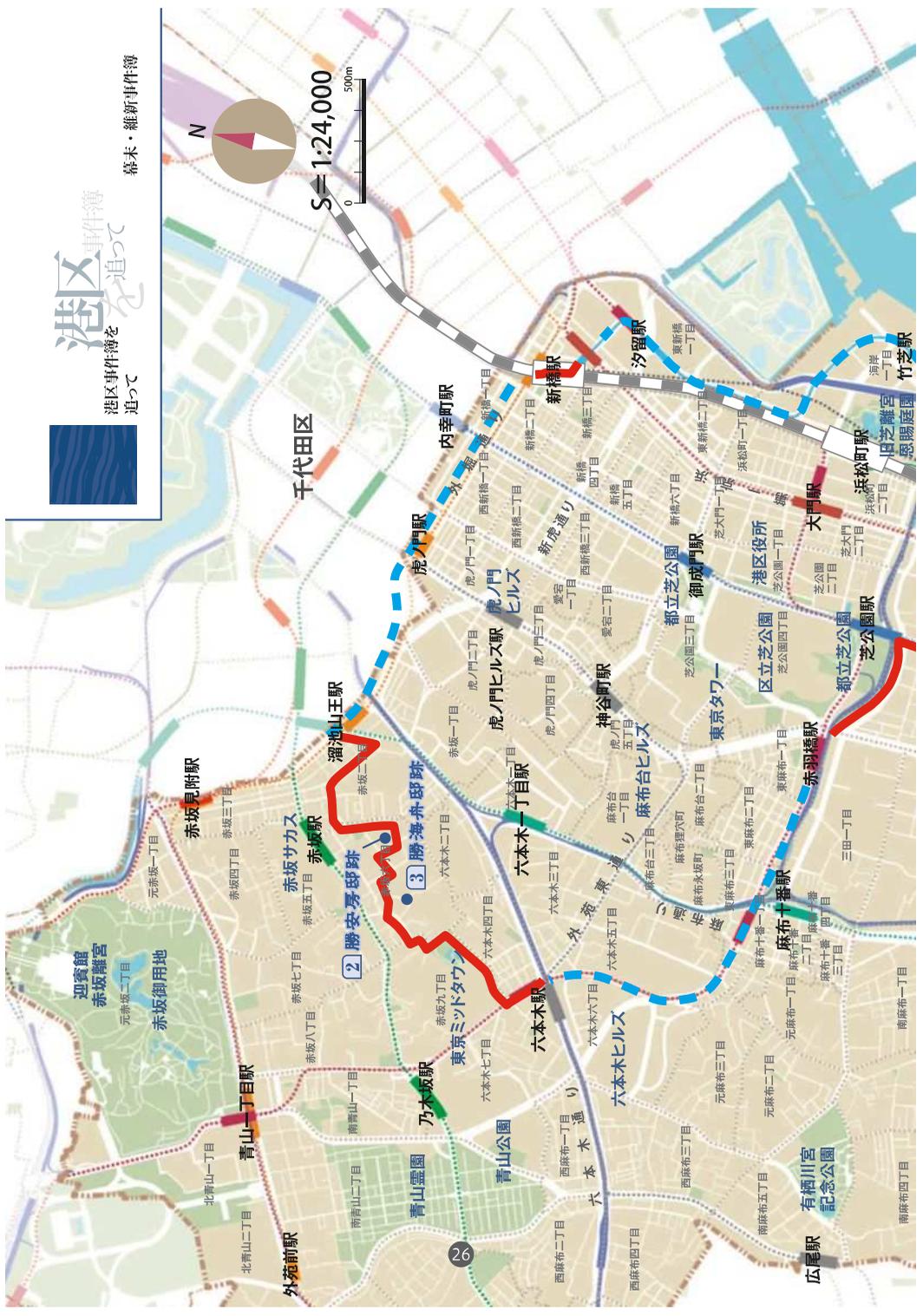
品川大筒町御台場出来之図

港区事件簿を追って

幕末・維新事件簿



S=1:24,000



千代田区

溜池山王駅

赤坂サカス

赤坂駅

乃木坂駅

青山公園

外苑前駅

2 勝安房邸跡

3 勝海舟邸跡

虎ノ門駅

虎ノ門ヒルズ

六本木駅

六本木ヒルズ

六本木

26

六本木一丁目駅

六本木二丁目

六本木三丁目

六本木四丁目

六本木五丁目

六本木六丁目

六本木七丁目

六本木八丁目

六本木九丁目

六本木十丁目

六本木十一丁目

六本木十二丁目

六本木十三丁目

六本木十四丁目

六本木十五丁目

六本木十六丁目

六本木十七丁目

六本木十八丁目

六本木十九丁目

六本木二十丁目

六本木二十一丁目

六本木二十二丁目

六本木二十三丁目

六本木二十四丁目

六本木二十五丁目

六本木二十六丁目

六本木二十七丁目

六本木二十八丁目

六本木二十九丁目

六本木三十丁目

六本木三十一丁目

六本木三十二丁目

六本木三十三丁目

六本木三十四丁目

六本木三十五丁目

六本木三十六丁目

六本木三十七丁目

六本木三十八丁目

六本木三十九丁目

六本木四十丁目

六本木四十一丁目

六本木四十二丁目

六本木四十三丁目

六本木四十四丁目

六本木四十五丁目

六本木四十六丁目

六本木四十七丁目

六本木四十八丁目

六本木四十九丁目

六本木五十丁目

六本木五十一丁目

六本木五十二丁目

六本木五十三丁目

六本木五十四丁目

六本木五十五丁目

六本木五十六丁目

六本木五十七丁目

六本木五十八丁目

六本木五十九丁目

六本木六十丁目

六本木六十一丁目

六本木六十二丁目

六本木六十三丁目

六本木六十四丁目

六本木六十五丁目

六本木六十六丁目

六本木六十七丁目

六本木六十八丁目

六本木六十九丁目

六本木七十丁目

六本木七十一丁目

六本木七十二丁目

六本木七十三丁目

六本木七十四丁目

六本木七十五丁目

六本木七十六丁目

六本木七十七丁目

六本木七十八丁目

六本木七十九丁目

六本木八十丁目

六本木八十一丁目

六本木八十二丁目

六本木八十三丁目

六本木八十四丁目

六本木八十五丁目

六本木八十六丁目

六本木八十七丁目

六本木八十八丁目

六本木八十九丁目

六本木九十丁目

六本木九十一丁目

六本木九十二丁目

六本木九十三丁目

六本木九十四丁目

六本木九十五丁目

六本木九十六丁目

六本木九十七丁目

六本木九十八丁目

六本木九十九丁目

六本木百丁目

六本木百一丁目

六本木百二丁目

六本木百三丁目

六本木百四丁目

六本木百五丁目

六本木百六丁目

六本木百七丁目

六本木百八丁目

六本木百九丁目

六本木百十丁目

六本木百十一丁目

六本木百十二丁目

六本木百十三丁目

六本木百十四丁目

六本木百十五丁目

六本木百十六丁目

六本木百十七丁目

六本木百十八丁目

六本木百十九丁目

六本木百二十丁目

六本木百二十一丁目

六本木百二十二丁目

六本木百二十三丁目

六本木百二十四丁目

六本木百二十五丁目

六本木百二十六丁目

六本木百二十七丁目

六本木百二十八丁目

六本木百二十九丁目

六本木百三十丁目

六本木百三十一丁目

六本木百三十二丁目

六本木百三十三丁目

六本木百三十四丁目

六本木百三十五丁目

六本木百三十六丁目

六本木百三十七丁目

六本木百三十八丁目

六本木百三十九丁目

六本木百四十丁目

六本木百四十一丁目

六本木百四十二丁目

六本木百四十三丁目

六本木百四十四丁目

六本木百四十五丁目

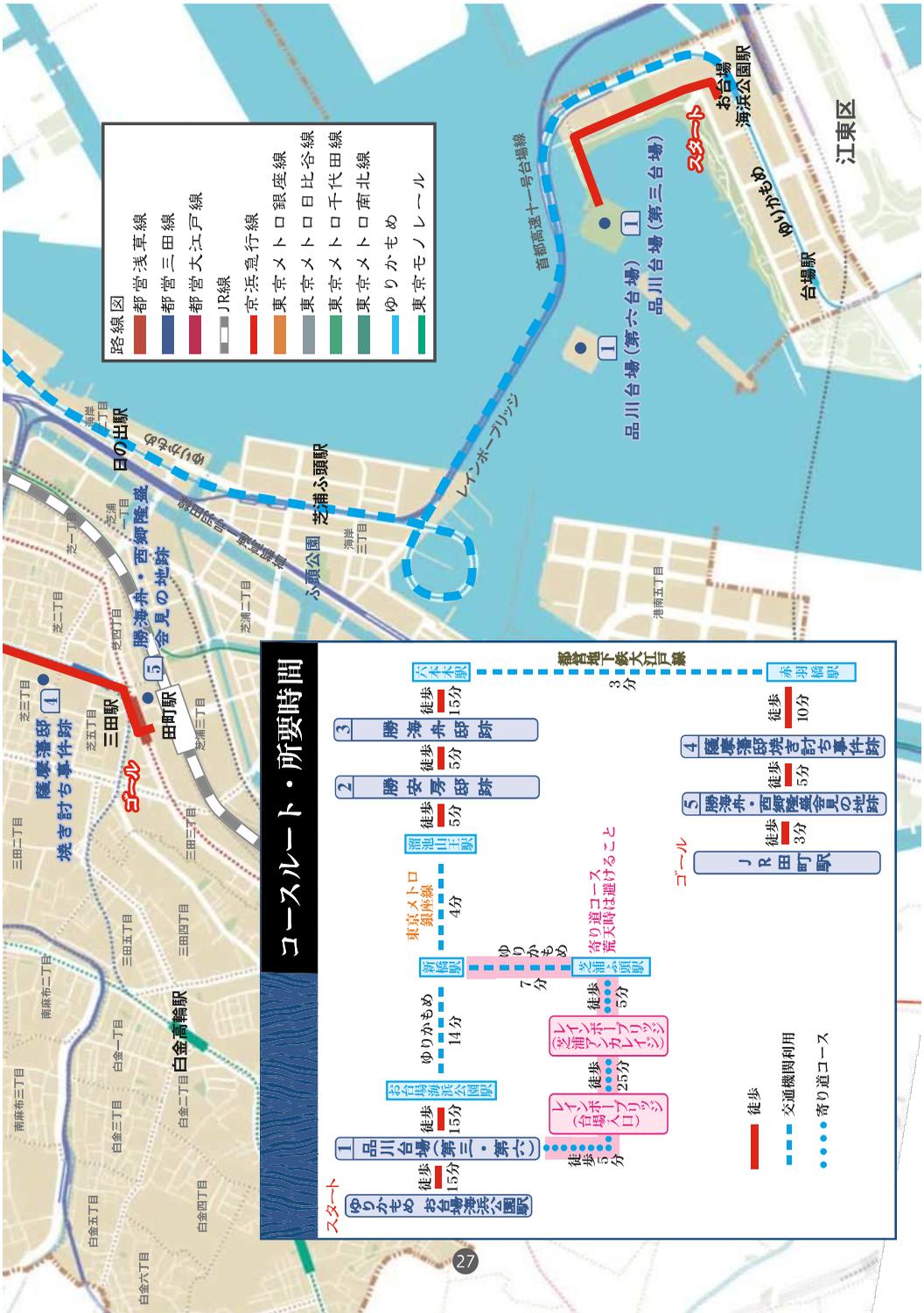
六本木百四十六丁目

六本木百四十七丁目

六本木百四十八丁目

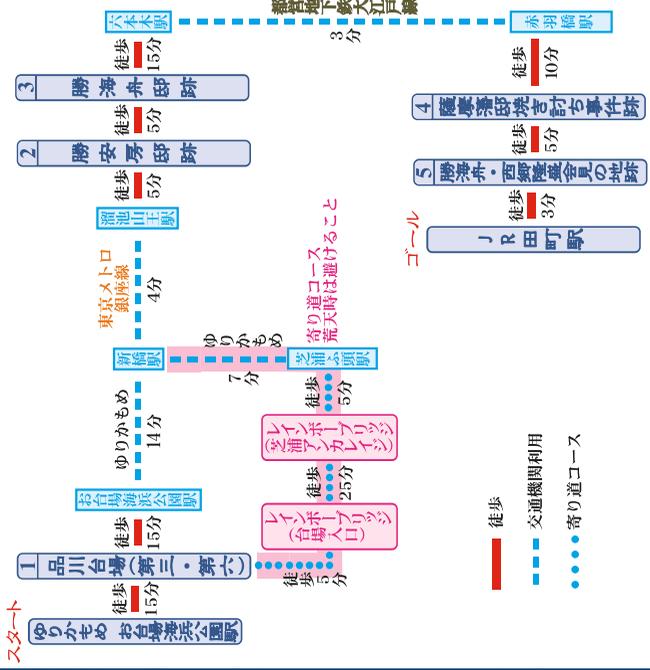
六本木百四十九丁目

六本木百五十丁目



- 路線図**
- 都営浅草線
 - 都営三田線
 - 都営大江戸線
 - JR線
 - 京浜急行線
 - 京メトロ銀座線
 - 京メトロ日比谷線
 - 京メトロ千代田線
 - 京メトロ南北線
 - ゆりかもめ
 - 京モノレール

コースルート・所要時間



幕末・維新事件簿

品川台場(第三・第六)

所 台場1-10、1-11

コース①

嘉永6年(1853)6月3日、浦賀沖に現れたペリー率いる4隻のアメリカ艦隊、俗にいう「黒船」は幕府や世の人々に衝撃を与えました。翌年の再来航に備え、海防のため急いで築かれたのが台場です。幕府は伊豆韮山代官の江川英龍に命じ、品川沖に洋式の海上砲台を築造させます。当初は11基を一定の間隔で建設する予定でした。嘉永7年(1854)4月に第一、第二、第三、11月に第五、第六と御殿山下砲台が完成しましたが、すでに同年の3月3日には日米和親条約が締結されたため、2基は途中で工事中止、残る4基の建設は行われませんでした。台場建設に用いる石材は伊豆半島や房総半島から運び、埋め立てに用いる土は御殿山や泉岳寺裏の山を切り崩し、総額75万両、5千人の人夫を動員した大土木工事でした。太平洋戦争後、第一・二・五台場は廃棄され、今は第三・第六台場が国の史跡として保存されています。 [国]



勝安房邸跡

所 赤坂6-6-14
サン・サン赤坂

コース②

ここは勝海舟が明治5年(1872)から同32年(1899)に77歳で死去するまで住んだ場所です。海舟は明治維新後、旧幕臣の代表格として外務大丞、兵部大丞、海軍大輔、参議兼海軍卿、元老院議員、枢密顧問官を歴任し、伯爵に叙されました。ただし、積極的に仕事をしたわけではなかったそうです。一方、新政府に対する批判や日清戦争に反対するなどその舌鋒は衰えることはなく、また、旧幕臣の就労先の世話や資金援助などに努めたそうです。晩年は『吹塵録』、『海軍歴史』、『陸軍歴史』、『開国起源』、『氷川清話』などの執筆や編纂にあたりました。明治32年(1899)1月19日、風呂上がりにブランデーを飲んだところで脳溢血になり、21日にこの地で死去しました。最後の言葉は「コレデオシマイ」だったそうです。 [私]



かつかいしゅう

勝海舟邸跡

所 赤坂6-10-39

コース③

ここは勝海舟が安政6年(1859)から明治元年(1868)、37歳から46歳まで住んだ場所です。安政7年(1860)、海舟は日米修好通商条約の批准書を交換する遣米使節団の護衛のため、咸臨丸の艦長(実際の肩書きは「軍艦操練所教授方頭取」)として渡米しました。帰国後、蕃書調所頭取、講武所砲術師範などを歴任し、文久2年(1862)に軍艦操練所頭取を経て軍艦奉行に就任します。同じ年の11月、坂本龍馬らが海舟を斬ろうと面会を申し入れ、逆に感化されたのもこの屋敷です。また、慶応4年(1868)3月に西郷隆盛と会談し、江戸城の無血開城を決定した時もこの屋敷に住んでいました(→30ページ)。その後、同年7月に徳川慶喜に従って駿府(現静岡市)に移るまで住みました。 [区整]



ヒュースケン暗殺事件跡

所 三田1-2、3、4

万延元年(1860)12月5日、アメリカ公使館通訳官ヒュースケンは赤羽接遇所から麻布善福寺の公使館に帰る途中、待ち伏せていた攘夷派浪士伊牟田尚平・樋渡八兵衛らに襲われ命を落としました。場所は新堀川に架かる中ノ橋の北側付近で、ヒュースケンは即死はまぬがれましたが、医師の手当てでも及ばず翌日死去しました。28歳でした。この時、警備にあっていた幕府外国奉行支配手附の鈴木善之丞らは襲撃者に抵抗せず逃げたため、諸外国の代表は外交官警固の不備を強く非難するとともに横浜に退去し、大きな外交問題へ発展します。これに対して幕府は外交官の警固と公使館の警備を強化し、またアメリカ側の要求によりヒュースケンの遺族に1万ドルを支払って事件を落着かせました。ヒュースケンは3日後の12月8日に麻布の光林寺(南麻布4-11-25)に葬られました(→36ページ)。

幕末・維新事件簿

薩摩藩邸焼き討ち事件跡

所 芝3-23・33、芝5-7付近

コース4

現在の芝2・3丁目の大半と4・5丁目の一部は、江戸時代、薩摩藩島津家の広大な居屋敷でした。慶応3年（1867）10月14日、大政奉還により徳川慶喜は政権を朝廷に返しましたが、依然として旧幕府と薩摩藩・長州藩は緊張した関係にありました。複雑な政治情勢の中、薩摩藩らは旧幕府軍と交戦する大義名分を得るべく、慶喜ら旧幕府首脳の大半が不在であった江戸で戦意を煽る工作活動を行います。その拠点となったのがこの藩邸でした。そして薩摩藩が江戸市中取締の庄内藩屯所を襲撃したため、その報復として同年12月25日に庄内藩らがここを攻撃し、藩邸は砲火によって焼失しました。この事件は戊辰戦争のきっかけの1つになりました。藩邸の痕跡は今では残されていませんが、芝3丁目23・33の一面に「薩摩小路」の名称がつけられ、往時を偲ぶことができます。



勝海舟・西郷隆盛会見の地跡

所 芝5-33

コース5

慶応4年（1868）3月13・14日、徳川家側の久保一翁（忠寛）・勝海舟と官軍側の西郷隆盛が会見しました。すでに3月9日に徳川家の山岡鉄舟が駿府（現静岡市）に赴き、西郷と会見して交渉の下ごしらえをしていました。15日の江戸城総攻撃直前の13日に予備的な会談を薩摩藩の拝借地で行い、翌14日にこの碑が建っている薩摩藩抱屋敷で最終的な話し合いが行われました。その結果、江戸城総攻撃は中止され、江戸は戦火から救われました。この地は江戸城の無血開城という歴史上重要な決定が下された場所なのです。なお、勝海舟はこの会談が破談したときは、江戸の町を焼き払い官軍の侵攻を止める作戦を練り、準備を進めていたそうです。江戸城は4月11日に開城し、大総督府が接收しました。

